「装丁」という仕事への思い

桂川 潤（かつらがわ・じゅん）
1968年、東京生まれ。95年から2誌の仕事を始める。共著に『本は、これから』（岩波新書）など。

■ 優秀な書店員は30秒で判断

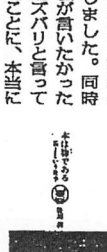
ある優秀な書店員の話ですが、「本の内容は、手にして30秒で分かります」と。書店の人は、私たち装丁に携わる人間から見たら、ライバル、批評家であり、理解者です。彼らは本のどこを見るのか。「まずタイトルと装丁を見る。そして、キーワードを選び、目次と内容をざっと見る。これで充分です」と言うのです。ですから、装丁を「単なる装飾」と軽んじることはできません。

一般に「装丁」と言えば、ジャケット（カバー）、表紙、帯のデザインをはじめ、用紙、表面加工、見返し、しおり紐等の資材・加工の指定を指します。1冊でも多くの良い本を読者に届けたいという思いで、私も年に200冊くらいの装丁を担当しています。

一昨年、『本は物である――装丁という仕事』（新曜社）という本を上梓しました。この本の装丁は、1995年に発行された夏目漱石の『吾輩は猫である』を意識して自装しています。

同書は、独創的な造本・装丁で近代日本のブックデザインの出発点となった本です。その表紙の、白と赤という基調色を拝借したのです。本文中でも漱石の装丁について触れているので、その伏線となる仕掛けですが、まあ「分かる人には分かる」といった遊びですね。

私が当初考えたタイトルは「装丁という仕事」でした。それを出版元の社長が「本は物である」を主題にしてくださったのです。言い得て妙だ、と感心しました。帯の言葉には、担当編集者が「本に命を吹き込む『装丁』という仕事」との一文を寄せてくれました。



桂川氏の著書『本は物である――装丁という仕事』（新曜社）

■ 余白（マージン）は作品世界の「縁側」

あらためて、本は、さまざまな人の手を通して作られるんだなと実感しました。同時に、私が言いたかったことをズバリと言ってくれたことに、本当に感謝しています。

本は「コンテンツ（＝情報内容）」だけあれば充分なのか。それで「本」と呼べるのだろうか――私は、こうしたことを世に問いたかったのです。いわゆる電子書籍への対抗心も少なからずありました。

率直に言って、電子書籍を勧める方々の中で、まとまった数の本をすべてモニター（画面）上で読み切った方がどれほどいるでしょうか？　年齢もあるでしょうが、実際に読んで見て、私は疲れて仕方ありませんでした。その理由の一つは、モニターというのが、そもそも閉じられた世界、パーソナル（個人的）な世界だからかもしれません。

紙の本はその点、オープンな感じがします。マージン（余白）の寛容性も強調したいところです。造本・装丁において、マージンの設定は外装デザインに勝るとも劣らない大切な要素です。マージンは情報を含ます。一見、無駄とも思えますが、しかし、マージンの設定いかんで、文字情報の表情や趣づかい、性格などが変化してくるのです。

マージンは作品の世界と現実の世界をつなぐ「橋渡し」であり、「縁側」のようなものです。時に早朝の木漏れ日が映り、午後の柔らかな日が差し込んでくることもあるでしょう。夕日や灯火に照らされる場合もあるかもしれません。読書時のそんな個別の状況こそ、〝エピソード記憶〟となって脳に刻まれていくのではないでしょうか。

そして何より、マージンには自由な書き込みができる。ただ情報内容を頭に入れるだけではなく、自分の人生の中の一こまと折り合わせて読むのが、読書だと思います。

「物である本」の愉しさ求めて

書き込みは読者の大切な財産に

桂川氏が装丁した書籍